京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第五十八卷 第一・二號

高田博士還曆記念論文集

昭和十九年二月發行

近代國民經濟の特徴としての計算合理性*

青山秀夫

一

これまで合理的運營の三つの型の相違について考へて來た。此の三つの型の相違は勿論重要でもあるし、またそれだけに顯著である。然し他面に於て此の相違が餘りにも顯著なため、此の三つの型に共通する、極めて重要な近代的特徴が見出され難くなつてゐる。それはかういふ合理的運營に於ける命令服從關係に共通する近代的特徴である。勿論今彼べた相違に基づいて命令服從關係は、一面極めて重要な相違をもつに到つてゐるが、然し、他面に於てその構成要素として此の三つの運營に共通する側面があり、此の側面は近代性をもつた共通特徴として輕視し難い意義をもつやうに思はれる。次に此の三つの運營に於ける共通の近代的特徴を取出して考察しよう。

或る思惟對象が與へられた場合、それを他のものと比較してその相違點と共通點とを明確にすればする程、その思惟對象の內面的構造が一層明かとなるであらう。比較に於て、共通點が明確となればなる程、相違の意義が明確となり、相違點が明確になればなる程、共通の側面の意義が顯著となる。かくして吾々は與へられた思惟對象を、その內部的關聯に於て、一層明確に把握出來るやうになる。これは當然のことである。通常吾々は軍隊・役所・會社といふ三つの合理的運營を、未分析に、並列的に考へてゐる。それは此の間の相違があまりに顯著であり、此の三つの比較を無意義ならしめると思はれるからであらう。然し第一に、ここでの分析が示すやうに、その間には重要な共通點がある。第二に、然しかういふ共通の側面を取出すことは決してその間の相違を無視することを意味しない。寧ろその相違の內面的意義は、共通の側面を取出すことによつて、一層明瞭となるわけであ

* 本稿は本誌前號所掲拙稿「近代資本主義經濟の二つの側面」とともに書かれたものである。併讀されたい。

る。吾々は三つの型の相違を輕視するものでは決してないのである。

いふまでもなく古代及び中世に於ける命令服從の關係を支配したものは、集權的官僚的たると分權的封建的たるとを問はず、身分の原理であつた。ところで「身分といふものは」、高田博士が適切に分析されてゐるやうに、「ある意味に於ては薄められたる血緣である。封建制度に於ける一集團はつねに家來、一門郎等の言葉を以て表現せられるのであるが、そこに作用してゐる情誼は家族內部又は氏族內部に於けるものゝ稀釋せられたるものとして意識せられる。身分に於ける上下は一面からいふと家長に對する家族成員の關係に似たるものとして意識せられる、威力を伴へども同時に愛撫を以てこれを包む。このことは封建制度のみならず、官僚的郡縣的統治にあつても然り。すべての隸屬關係が家族感情的なるものによつて裏付けられてゐる。強く支配してゐるところの共同社會的要素はつねに一種の家族的雰圍氣であり、擬制的なる血緣である」。(高田博士、「勢力論」、新經濟學全集、二六二頁)[1]。從つて身分の制度の下に於ける命令服從關係は主從の情誼の絆の上に成立つものであつた。服從者は、命令者がその時如何なる資格をもつか、また命令の內容が如何なるものであるか、については全然顧みない。ただ私的情誼に基づいて、謂はば私人としての命令者に獻身するのである。例へば平家物語に謳はれてゐる義仲最後に於ける今井兼平の獻身、或は太平記の北條仲時・北條高時の最後に於ける關東武士の獻身は、身分の制度の下に於ける命令服從關係の此の性質を最もよく示すものである。要するに、服從は、私人としての命令者に、命令の內容及び命令者の資格に拘らず、捧げられたのであつた。

近代軍に於ける獻身の對象がかういふ私人としての命令者に存しないことは明かである。服從者は命令者とともに君國に獻身するのである。命令者の命令が服從者によつて服從されるのは、軍隊の命令系統の秩序に於て此

1) 尙此の構想は單なる理論家の思ひつきではなく、歷史的事實の廣汎なる觀察によつて詳細に裏付けられてゐる。Max Weber に於ける支配の soziologische Typisierung 乃至 schematische Systematik (「合法的支配」「傳統的支配」「神威的支配」) から出發する社會構造の分析を見よ。(例へば、„Wirtschaft und

の二人の間に命令者と服從者との關係が成立し、命令が、與へられた秩序に從つて軍隊全體の運營に役立つやうな內容を持つからに他ならない。命令者も服從者もともに君國、卽ち私ならぬ公なるものに對して獻身・奉公するのである。身分制度に於ける獻身の目標は私人としての命令者そのものに他ならなかつた。近代軍に於ては全軍を通じて勤務者は私ならぬ獻身目標を共通に有つてゐる。此の共通なる獻身の目標に對しては全勤務者擧つて平等の關係に立つ。命令者の命令が遵守されるのは、與へられた秩序に從つて命令者に命令者としての資格が與へられたからである。此の資格を拔きにして云へば、命令者も服從者もひとしく、仲間であり、戰友であるはずである。

明かに今軍人について敍べたことは、近代國家の役人についてもそのまま成立つ。上官も下僚もともに君國を共通の獻身の目標としてもち、役所に於てこそ命令服從の關係に立つにしても、一步役所を離れればひとしく國民として平等の地位に立つ。ところで此の點會社はどうであるか。ここでの服從は、上にも敍べた通り、勿論契約に對する忠實Vertragstreueに基づく。また會社の運營目的は會社財產の價値增加といふ謂はば物質的性質のものである。然し、かういふ相違はあるにしても、ここにも會社全體の運營目的といふものがあり、命令者も服從者も凡て勤務者は此の私ならぬ目標に對して協働してゐるのであり然も會社を一步離れれば、原則として平等の地位に立つのである。[2]

勿論、上に敍べた通り、軍隊・役所と會社との間には注目すべき顯著な相違がある。然しその反面に於て、そこでの勤務者は凡て共通の勤務の目標を有し、然も此の目標は私人的性質のものでないといふ點に於て、また社會學者の所謂社會的水準化、卽ち身分の差等の水準化を基礎にもつといふ點に於て共通の側面を有つのである。

Gesellschaft"、第一部第三章及び第三部に於ける。)

2) 但し會社の場合については別の機會にも詳論したやうに相當の Idealisierung を要する。尙此の企業の獨立性 (所謂 Verselbständigung des Geschäfts) については、 Werner Sombart: Die Entstehung der kapitalistischen Unterneh-

以上に關聯して尙注目すべきことがある。近代軍の將卒が旺盛な責任觀念を有することは周知の通りである。近代軍の軍人はかういふ責任觀念に基づいて常にその行動の效果を打算し、軍隊全體の目的に些かでも貢獻するところ多いやうに、その行動を選擇する。官吏も亦同樣な責任觀念を持つてゐる。會社の場合には、責任觀念の內容は確かに軍人・役人の場合とは異なつてゐる。然し會社全體の目的達成に對してどういふ效果をもつかを打算して行動が選擇されるといふ點では可成共通する側面がある。吾々は武力貴族の時代に於て謂はば騎士道德として支配的であつたのは「心情の倫理」Gesinnungsethik であつたと考へたい。若し此の考へが許されるとすれば、かういふ「責任の倫理」Verantwortlichkeitsethik が個々の勤務を支配することは、近代的なる合理的運營の一つの共通なる特徵と云へるであらう。

二

軍隊・役所・會社、此の三つの近代的合理的運營について、吾々はこれまでその相違點と共通點とを交々に明かにして來た。勿論その共通點も相違點もただこれだけに盡きるわけではない。況んや、その運營の內面的構造全體について云へば、分析の餘地は尙多く殘存してゐる。然しここでは、これだけの分析に基づいて、かういふ共通の構造からこれらの團體の合理的運營の內容を明かにしようと思ふ。

吾々は先に、家計と勤務先との分離、訓練を有する專門家の協働が近代性をもつた共通の特徵であることを敍べた。ところで此の二つの特徵の間には極めて密接な內面的聯絡があると思はれる。勤務者はそれぞれ何らかの團體的訓練 discipline を身につけ、團體的訓練によつて自分に振當てられた專門的部署（「職域」）で機能するわけであるが、先づ此の團體的訓練について考へよう。團體的訓練については先にも敍べたやうに、軍隊の場合が最も模範的である。從つて先づ軍隊の場合について考へよう。

近代に於ける訓練の特徵はその集團性にある。このことは古代及び中世の騎士に於て一騎打や一番乘りが重ん

mung, Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, 41 Bd, 1916. を見よ。

ぜられ、「武藝」に於て個性の全人的完成が目標とされたことと思ひ併せれば直ちに明瞭である。此の點について深く立入ることはここでは差控へるが、兎に角、近代軍に於けるあの秋霜烈日の如き嚴肅にして且徹底的なる訓練の目標は、一言にしていふならば、個人又は部隊としての團體成員をして團體運營の要求に從つて、團體全體の秩序を適確に維持しつつ、命令一下、直ちにその命令を現實の行動に體現する如き精神的・肉體的・物理的裝置たらしめることにある。訓練の目標が團體成員の活動を、恰も小銃や大砲が規格化されてゐるのと同樣に、規格化するのも此のためである。訓練は、操典に於て豫め計畫的・統一的に設定された規則に從つて、規格化された行動が、命令一下、直ちに實現され、從つて策戰計畫の樹立に當つて團體の構成部分の行動の樣式とテムポとが計畫當事者に豫見されるとともに、またその計畫が、計畫のもつ秩序をそのまま少しも紊すことなく實現され得るやうになることを目標とするものである。ところで、斯くの如き訓練に從つた行動は他方に於て人間の自然的欲求乃至私情と相尅するところのものを多かれ少かれ含むでゐる。訓練とはかかる自然的欲求を自發的に制壓する能力を鍛冶し、かくて命令一下、直ちに反射的に、命令に應じた一定の・規律に適つた行動が行へるやうにすることに他ならない。軍隊の訓練は徹底的であるから、軍隊の訓練に於て吾々は、訓練によつて此の「禁欲」的性格が如何に陶冶されるか、また團體の規律に從つた行動が如何に私情の抑制を必要とするか、を最も顯著に觀取することが出來る。[1] 然し、これ程顯著ではないにしても、役人や會社從業員の場合にあつても、與へられた部署に於て團體の規律に從ひつつ行ふ活動には多かれ少かれ自然的欲求乃至私情の制壓が必要であり、彼等が身につけてゐる專門的訓練は此の禁欲の能力を高めることに役立つのである。要するに、訓練に從つた勤務は、自然的欲求の制壓、即ち禁欲的性格を伴ふのである。筋肉や肉體に生得の有機的リズムに逆らひながら、不斷の緊

1) 勿論その反面に於て自我の擴充 (Erweiterung des Ichs) の歡びが體驗される。

張を以て、機械の運動が要求するリズムに從つて機能するとともに、自分獨自の作業の成果を手にとつて見る喜びをもたぬ近代勞働者の場合を、例へば手工業者の場合と比較しながら考へるならば、このことは直ちに明かとなるであらう。

かくの如く、勤務先でその部署に於て專門的に訓練に從つて行はれる勤務は、多かれ少かれ、禁欲的性格をもつ。さて然し乍ら、此等の團體は何よりも大量成員團體であり、從つて勤務者全體にわたつて非凡の能力を要求することは不可能であり、從つて團體成員の大多數は、謂はば平均の能力を有つた常人（Durchschnittsmensch）である。勿論此の平均の能力の水準は時と場合とにより著るしく高低があり、更に此の水準を訓練或は指導によつて高度化することが望ましい。實際このことはどれだけ强調されても强調され過ぎることはない。[2] 然しかかる常人に對して一定限度以上の禁欲の久しきに亙る持續を望むことは、例外的場合はあるにしても、一般には不可能である。特に持續的に、日常的に運營を行はねばならぬ大量成員團體に於ては尙更さうである。從つて勤務先で專門的訓練に從つて抑制された自然的欲求に對して謂はばその捌け口がなければならぬ。通常吾々は家庭を休養の場所と考へてゐるが、多くの場合此の家庭が此の自然的欲求の發露の場所である。家庭に於ては吾々は、私人として、――或は良き子として、或は良き夫として、或は良き父として、或は良き友として――感情の流露するまに、家族・血緣・隣人・友人とともに、或は泣き或は笑ふ。かやうに私情に對しては家庭がその發露の場所として與へられる。今や上記の勤務先と家庭との分離の內面的意義は明かである。重要なのは、勤務先と家庭との空間的分離ではない、寧ろ今敍べたやうな行動の仕方の區別であり、かういふ區別を生むやうな雰圍氣の區別である。勤務先と家庭との區別は近代を俟たずして存在したであらう。然し乍ら、かういふ內面的意味に於ける

2) 此の點については君國に對する責務感情或は宗敎的信念（例へば asketische „Berufsethik"）のもつ意義が考へられる。このうちウエーバーは、周知の如く、特に後者を重要視した

「公私の區別」は近代社會特有の事情と考へられねばならぬ。私情に對して發露の時間と場所とが別に用意されて居り、勤務先での執務は sine ira et studio, ohne Hass und Leidenschaft に、謂はば私情を混ふることなく遂行される。かくて勤務先では、配置された部署に於て、自分が身につけてゐる專門的なる訓練乃至規律に從つて、自然的欲求を制壓しつつ、その責任が遂行される。家庭では氣力が恢復される。此の新しい氣力によつて、勤務先では、如何なる障害にも打克つて團體全體の目的に奉仕する一つの精神的肉體的裝置と化す。かういふ生活はいふまでもなく、近代社會の軍隊・役所・會社の凡ゆる部分に侵透してゐるが、此の內面的事情こそ、上記の近代社會生活の二つの特徴――勤務先と家庭との分離並びに訓練によつて修得した專門的才能及び規律への服從能力の利用――の背後にあつてこれを統一するところのものである。要するに、勤務先と家庭との分離を通して、夫々の部署に於て專門的能力が最も效果的に發揮されるのである。

三

さて上に敍べたやうに、軍隊・役所は勿論、會社に於てすらも、團體全體の運營目的は、勤務者全體にとつて命令系統に於ける地位の如何に拘り無く共通するものであり、然もそれは私ならぬものである。軍隊・役所の場合には君國といふ「公なるもの」であり、會社の場合には會社財產といふ Sondervermögen の價値增加である。明かに勤務者の物的經營手段からの分離といふ上記の構造は此の構造と關聯を有し、勤務者の團體全體の目的への奉仕を一層效果的たらしめるものである。此のことについて敍ぶべきことは極めて多いが、然し合理的運營の內容の說明を目的とする本稿ではこれ以上立入らない。兎に角、團體全體の運營目的といふものがあり、そのための勤務が凡ての勤務者の共通の課題なのである。さて、運營が合理的であるとは、此の課題が最も效果的に解決

されることに他ならぬであらう。勤務者が、家庭の休養によつて回復された氣力によつて、(更に軍隊・役所の場合には熾烈な責務感情に鼓舞されて)、自然的欲求を能ふ限り制壓しつつ、專門的訓練に從つて勤務先の部署で行ふ勤務(「職域奉公」)こそ、此の意味の合理的運營を實現するものに他ならない。次にこのことを敍べるが、此の場合も軍隊について考察を進めよう。

先にも敍べたやうに、軍隊の訓練は操典によつて行はれ、命令一下、反射的に團體成員(個人又は部隊)の行動が操典に示された規準に從つて行はれることを目標とする。ところで此の目標が到達されることは何をもたらすか。第一に、團體成員の凡ての行動について、一定の命令が與へられた場合、如何なるテムポで如何なる樣式の行動が行はれるかが、あらかじめ豫見され得るに到ることである。卽ち、計算可能となることである。第二に、或る命令計畫が編制された場合、その命令が、計畫自身の秩序を紊すことなく、そのまま全成員の行動に實現されるに到るといふことである。此の二つの事情が專門的なる團體的訓練の差當つての效果である。ところで斯くの如き事情の下に於て、團體全體の行動について周密廣汎なる計畫を作製することが可能となるとともにまた有意義となることは見易い。命令に對する團體成員の反作用は計算可能なのである。從つてここには團體全體の運營目的に對して最も效果的と思はれる計畫が編制可能である。更に亦、此の計畫は、豫定されたテムポと秩序とを以て、成員全體の行動の上に體化されるのである。從つて計畫は單なる畫餅に終らず、有意義である。

時計は、ねぢさへ捲いて置けば、直ちに規則正しく動き始める。それが規則正しく動くといふのは、表面的にせよ、兎に角その動き方が豫測可能であることを意味する。かくて吾々は、何か或るものが與へられた場合、それに或る一定の刺激を與へれば、直ちに反射的に或る一定の(刺激に對應する)反作用を示され、その反作用の仕方が

豫め豫知され得る場合、そのものは「機械のやうに動く」といふ。吾々は此の意味に於て「機械」といふ言葉を譬喩的に用ひるが、かういふ譬喩的な意味に於ては、凡ての個々の成員に對して徹底的なる訓練が專門的に與へられてゐる近代軍は、まさに一つの機械に譬へることが出來る。[2] 從つて吾々が今說いた近代軍の構造上の特徴は此の意味の機構性に他ならぬわけであるが、然し、役所にせよ、會社にせよ、此の意味の機構性を有することは直ちに理解されるであらう。勿論軍隊・役所・會社の間には、前述べたやうな相違があり、その結果その機構性の內容には若干の相違がある。然しさういふ相違はあるにしても、兎に角此の三つの團體が機構性を持つことは否定し得ない。團體的訓練の本質的意義は、一面に於て、此の機構性の確保にあると云へよう。

ところでかくの如く團體が機構性を持つ場合、全成員の協働によつて團體全體の目的が最高度に遂行されるやうに、計畫が編制され得るやうになることは、直ちに明瞭である。軍隊の場合について云へば、全戰鬪員の精神的・肉體的・物理的攻擊力を最高度に發揮するやう、策戰計畫を編制することが可能となるのである。吾々は先に、軍隊も役所も會社も近代に於ては大量成員を擁すると云つた。軍隊の成員は戰時に於ては數百萬・數千萬に及ぶと云はれる。かくの如き大量成員の能力を、計畫によつて、團體全體の運營目的に對して最も效果的に集注することが、機構性によつて可能ならしめられるのである。これが軍隊・役所・會社の合理的運營の內容である。

吾々は先に計算合理性を定義して、どこまで周到廣汎に計畫が樹立されるか、更にまた、制度がかういふ周密廣汎な計畫の實現を可能ならしめるか、によつて計算合理性の程度をはかると云つた。ところで吾々のこれまでの分析は此の計算合理性が如何なるものであるかを、具體的に示してゐると云へよう。軍隊にせよ、役所にせよ、企業にせよ、極めて尨大な成員を有するか、かかる尨大な成員の行動について極めて周密廣汎なる計畫が樹

2) 個々の成員の創意は、その時時の軍情に應じて働くといふ、既述の軍情を考慮すれば、それは機械以上である。

立され、然も此の計畫がそのまま成員全體の行動に具體化され得るのである。軍隊・役所・會社の近代的組織は計算合理性の現實化に他ならぬとも云へよう。

以上に於て吾々は近代軍・近代國家官廳・近代的企業の三つの運營團體を思ひ泛べながら、それに近代性を賦與するとともにそれらを共通する特徴とその合理的運營の內容を明かにし、その合理的運營が團體の機構性に基くものであり、その共通な近代的組織が計算合理性の實現に他ならぬことを明かにした。ところで然し此の三つの團體に於てかういふ共通の性質が存在することは偶然の暗合と見らるべきであらうか。既に示したやうに、此の三つの團體のかういふ組織がともに身分の差等の水準化に基くといふ事實は、ただそれだけでも、それが偶然の暗合でなく、謂はば社會學的同根關係に立つことを示してゐる。更にここに敍べたやうな傾向、ウエーバーの表現を用ふるならば Bürokratisierung は、單に軍事的組織・政治的組織・經濟的組織に於てのみ認められる傾向ではない。政黨にせよ、「學校」にせよ、教會その他の宗教團體にせよ、學術團體にせよ、或は藝術團體にせよ、その組織は多かれ少かれかういふ傾向を有つてゐる。勿論、團體特有の事情によつて、此の傾向の內容には相違があり、また此の傾向の進行程度にも相違がある。然しかういふ傾向が近代社會生活內部に於て相當普遍的であるといふ事實は、寧ろ吾々をして此の傾向を寧ろ近代社會生活そのものの一つの特徴であり、軍隊・役所・會社の場合はその特殊の、然し重要な場合であるといふ考へに到達せしめる。勿論かういふ傾向は、近代社會生活の特徴の凡てではない、然しそれはその一つの特徴と考へられるのである。

吾々は先に近代資本主義經濟に於て、計算合理性は合理的なる經濟的經營に於て最も顯著に示されると敍べた。ところで合理的なる經濟的經營そのものは、國家の經濟に對する規制がどうあるかに拘はらず、近代經濟生

活の内部に一貫して存續する。このことは、團體の組織の機構性が近代社會生活の特徴である以上、當然と云はねばならぬ。經濟生活が社會生活の一面である以上、社會生活の特徴は經濟生活内部にも侵透するわけである。吾々は今、更に一歩を進めて、かういふ特徴をもつ近代社會生活乃至近代國民生活の一環として、近代國民經濟といふものを考へようと思ふ。從つて近代國民經濟は、自由經濟たると統制經濟たるとを問はず、近代社會生活の一環としてこれらを包むものであり、經營の計算合理性がその一つの決定的特徴として考へられるものである。然し此の近代國民經濟の概念についてすら、説明を要する問題が尚殘つてゐる。

附記—ただ目前の傾向しか見ることが出來ない一部の學者は、最近の經濟生活の變化に眼を奪はれてこれまでの經濟理論について疑惑を抱き、その意義を否定せんとしてゐる。然し最近の經濟生活の變化が提供する問題の多くの部分は、吾々の見るところによれば、從來の經濟理論の否定ではなく、寧ろその擴充を要求してゐるやうに思はれる。かういふ立場からして、近代國民經濟といふ概念を中心に一つの效果的な觀點を示さうと思ふ。最初は今敍べた立場から此の觀點を適用しながら經濟統制の問題を取扱ひ、吾々の觀點のもつ意義を例證する心算であつたが、本稿では此の觀點の内容をただ部分的に示すことしか出來なかつた。經濟統制の問題について云つても吾々の觀點はこれを一般理論的に(一貫する觀點の下に種々の個別的場合を包括しながら)取扱ふ一つの途を示すであらう。